
[BF2142]とある兵士の受難と幸福[× (クロス) オリジナルワールド]

aine

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「BF2142」とある兵士の受難と幸福「×（クロス）オリジナルワールド」

【Nコード】

N4993J

【作者名】

aine

【あらすじ】

<http://ncode.syosetu.com/n5736jj/>

とある兵士の受難と幸福 続

と云うことで、続きらしきものを掲載しました。

一発ネタ。

BF2142（PCgame）×オリジナルファンタジーワールド

近未来FPSの兵士が魔法の世界に迷い込んだらという一発ネタ。

主人公がちょっとチートを使います。

とはいっても、魔法という範疇に収まるかも知れませんが。

とりあえず主人公がTUEEE系ですので、そういうのが駄目な人は回れ右で。

(前書き)

一発ネタ。

B F 2 1 4 2 (P C g a m e) × オリジナルファンタジーワールド
近未来FPSの兵士が魔法の世界に迷い込んだらという一発
ネタ。

<http://ncode.syosetu.com/n4993j/>

続きの様なものらしいです。
詳細は後書きに。

さて、唐突な書き出しですまない。

私もこの状況をどう書き出せばいいのか考えあぐねている。

だが拙くとも私が体験した出来事を手記として綴ろうと思う。

そしてペンを置く時は願わくば故郷の土を再び踏めていることを願うて。

まずこの本を何らかの理由で手に取った方へ

私の名前はトーヤ・トウゴウ、帰るべき道を見失った異世界来訪者である

信じぬかも知れぬ、いや信じられぬのかも知れぬだが私は、はつきりとした世界とは違う世界からやってきたのだ。

証明することは文字だけでは難しい、だがいくつもの物証を所持していることをここに記そう。

残念に思うのはそれらをこの文を読んでいるあなたに提示できないことだ、だから、そう、これから記す事が真実で合ったと証明する手段を持たない。

だがもしよければ文字を追ひ、ページを捲っていただきたい、私がこの世界に居た証として。

私がこの世界へと足を踏み入れたのは、いまよりも前、ヒルガルト大陸が激動の時代へと突入する王国暦1040年のことだ：

アラミス王国暦 1046年 トーヤ・トウゴウ手記書き出しより

私のいた世界は、発達した機械文明と文化により二度の世界大戦を経験し、その後は緩やかな緊張に包まれながらの経済戦争と発展途上国を舞台とした代理戦争、そしてテロリズム、利権と殉教精神による戦争に彩られた歴史を歩んできた。

だが、それでも私の居た国だけを見れば、100余年に渡る緩やかな平和を謳歌し、人々は不自由の中にある自由を甘受していた。私達の年号で21世紀の終わりまでは、であるが。

22世紀の初頭の事だ、私のいた世界に突如として大氷河期が訪れた。

次々と土地が分厚い氷と雪に埋もれ、土地と資源が次々と失われていった。

そして、西暦2142年、我が世界の人類は真つ二つに陣営を分かち、残された土地と資源を巡って争い始めた。

ヨーロッパ連合”EU”、アジア連合”PAC”、血で血を争う戦争を始めた二大勢力。

私も今でこそこのように話す事ができるようになったが、

私も”PAC”の一員として、この無意味な、しかし避けられなかった戦争を駆け抜けていたのだ。

我らがPACは資源と作物の実る土地を求めてEUへと進行、アフリカ大陸北部、そしてヨーロッパに置ける戦闘を勝ち抜き、一時はEUをアフリカ南部へと追いやる事にまで成功した。

だが、2145年、枯渇寸前の資源と伸びきった補給線によりもはや息切れる寸前であったPACは、EU軍の反抗作戦の前に敗退を重ね、ついにEU軍の反抗はドイツにまで達した、第二次世界から再び、またもライン川が重要な戦略防衛ラインとなったのである。

そして2145年3月7日、奇しくも第二次世界大戦でアメリカ軍第9装甲師団がRemagen Bridgeを渡ってから ちょうど200年後のその日に、EU軍はライン川東岸に足場を築くべく Remagen Bridgeの進軍を開始した。

そして同時にその日は、私がこちらの世界の土を踏む原因となった日でもあり、私もその戦場に立っていた。

PAC軍第11独立歩兵大隊、第4中隊所属、第3小隊長、トーマ・トウゴウ、階級は戦時中尉。

独立大隊などと多少カッコのつく名前ではあるが、ようは壊滅した師団の生き残りを掻き集めて作ったあり合わせの部隊のことだ。

そしてもはやヨーロッパに陣取るPAC軍には装甲兵器を運用するための燃料はほとんど残っていなかった、それはEU軍も同じではあったが、元々ヨーロッパはEUの領地、補給線の短さの差がEUに装甲兵器の使用を可能にさせていた。

PACは廃棄された装甲車の燃料タンクの底すらからも掻き集めた燃料により、なけなしの機甲戦力を整えた、とはいえEUの進行を防ぐことができるとは末端の兵士ですら思っではいなかった・・・。

PAC戦略防衛ライン Remagen Bridge

頭の上を銃弾が飛び交う、こうして打ち合いはじめてから数時間が
立った様に感じるが、目の前に表示されるヘルメット一体型のHUI
Dディスプレイに表示される時間がまだ10分しか立っていない事を示していた。

「ヤコフ！ヤコフはいるか！」

コンクリートブロックで構成されたレマーゲン橋、その橋台の地上
部分が二階構造になっているのを幸いにその屋上に陣取り、コンク
リートのフチをバリケード代わりにEU軍と銃撃戦を行っていた。
轟く銃声と、橋上に陣取ったAPCと戦車が放つ砲声に負けぬよう
に声を張り上げ部下の名を呼んだ。

「ここにおります！」

敵に射線をとらせぬように、背を低くしながらヤコフは駆け寄って
きた。

だが、その間にも一人の味方が不用意に顔をだし、敵のSRスナイパーライフルに頭を
打ち抜かれていた。

「くそつ、馬鹿野郎が！」

思わず罵りの声をあげる、だが時間はまっではくれない、すぐに思
考を切り替えてヤコフへと顔を向ける。

「立て籠もっているだけじゃジリ貧だ、おまえはAlfa、Bra
vo分隊を率いて右の高台の上を奪還しろ、俺はCharlieを
引きつれて左方に火線を誘導する、いけっ！」

「了解しました！」

ヤコフは小さく敬礼すると、無線で同じ内容を聞いていた分隊員を
引き連れて橋台の右へとかけて行く、それを視界の端に治めながら
私は橋台の左へと駆け出す。

「Charlie分隊はついてこい。残りはこちらを死守しろ！」
何名かが頷いたのを確認しつつ、私は勢いよくフチを乗り越え地上
へと身を躍らせる。

私に気づいた敵兵の放った銃弾が、体の至近を駆けていく。
だが当たりなどはしない、こんなところで死んでたまるか、そう思

えば玉は自然に体をそれていく。

もちろん根拠などない、だがそうでも思わなければ、こんな銃弾の雨の中を駆け抜けるなど出来ない。

橋台の至近に立つビル影まで一息に走りつづけた、敵の弾はコンクリートの壁面に弾かれてこちらには届かない、遅れてCharlieのやつらがやってくるが一人も欠けてはいない。

だが敵も素早い、反対側からすでにこのビルにとりつき、ビルに設けられている外周通路にまで迫っていたようだ、張り付いている壁面の頭上から足音が聞こえる。

ネックマイクによる無発声無線でCharlieに指示をだす。

数名が強化グレネードを通路へと放り投げる、同時に援護兵が最新鋭の歩兵ソナーを設置する。

敵の慌てる足音と同時に、ヘルメットに内臓され隊員同士をつなぐネットワークデバイス、Netbatを介して歩兵ソナーの情報が共有される。

HUDに表示された敵は6名、いける。

「時間をあたえるな！二人は壁を回って反対から、残りはつつこむ！」

部下の肯定の返事を聞きつつも、すでに体は通路へと繋がる階段へと駆け出している。

グレネードはただの牽制だ、現に敵に被害を与えられてはいなかったが、敵に混乱と通路内を押し戻す事に成功している。

敵が再び統制を整える前に射線に収めれば不意をつける。

経験から確信を得ると、フルで20kgを超えるアーマーと武装を物ともせず階段を駆け上がる。

数メートルの直進の直後、角を直角に伏せながらも飛び出す。

「ドンピシャだ！」

敵兵は3人ほど見えたが、隊列が乱れており、こちらの射線上に一直線に並んでいた。

敵はTKを恐れて後ろ二名が即応できない、その間にも私は引き金

を引いていた。

独特の音を日々かせながら、私の持つアサルトライフル”Baur”がマズルフラッシュとともに弾丸を吐き出した。

強引に銃のリコイルを押さえつけフルオートでなぎ払う。

敵兵がもんどりうつて倒れる。

ナノテクノロジーと高分子素材の結晶であるボディアーマーを銃弾が貫通するのはよほど至近でなければならぬ。

ゆえに私の撃った弾は特に装甲の厚い心臓周辺は打ち抜いてはいなかったが、連続で銃弾が着弾する衝撃全てを吸収することはできないのだ。

強烈な衝撃は兵士を心停止にまで陥れる、大抵のやつはそのまま死ぬ。

だが、勝利の余韻に浸る暇も無く、途中に設けられたビル内部へと繋がっている通路より敵兵が現れる。

しかしながら、その様子も歩兵ソナーがNetbatを介して贈ってきている情報により容易に予測がついていた。

半分以上を使ったARのマガジンを入れ換えることなどせずに、余裕をもちさえして、AR下部に取り付けられた対人口ケットへの切り替えスイッチを左手でおす。

PK74-AR-Rocketは一部の功績のあった歩兵へと優先配備されている新型装備だ、特殊な合成燃料化合物を使用し、さらに銃に内蔵されているFCS（火気管制装置）とヘルメットのHUDの連動により任意の距離でエアバースト（空中炸裂）を行うことができる軽対人口ケットである。

これの登場により戦場の概念は塗り変わったといってもいいものだ。それを敵があらわれるであろうT字になっている曲がり角へとセツトしていた

敵の体の一部が見えた時点で躊躇い無く引き金を引く。

風きり音を響かせながら飛行し、まさに最高のタイミングで爆発す

る。

敵兵の一人を殺傷し、後ろに続いていた二名にも衝撃を与えた。すかさずに、追いついてきていた部下が追撃をかけ殲滅する。

もはやこのビル内に敵はいない。

外から回り込んだ味方から通信がはいる、敵の後続を足止めしているようだ。

そうだ、もっとこちらに注意をそらせ。

その分だけヤコフの成功率が上がる。

ビルの外から思い出したかのように飛んでくる敵のARロケットを避けつつ、通路から頭をだし、こちらもロケットを放つ。

一瞬視界に写るのは歩兵だけで二個中隊はいそうな敵兵の影だ。

それに大して此方の歩兵戦力は一個中隊のみ、ここが突破されることは、PACのヨーロッパ本部ライブチヒへの道を明けてやる事になる。

だというのに、この兵力差。

「無能な指揮官め……」

レマーゲン橋攻略戦、敵のEU軍は開始早々攻撃ヘリにより制空権の確保に成功してしまう。

PACの攻撃ヘリも果敢に応戦はしたのだが、その全てを撃墜されてしまった。

この時代には、もはや燃料と整備部品をを大量に消費する航空戦闘機は姿を消している、ホバリング機構によりどんな戦場でも活躍できるジェットヘリにとって変わられていた。

制空権を取られたPACは敵の輸送ヘリによる敵兵の渡河を許してしまう。

工兵の持つ対空ミサイルSAAWにより、その幾つかを打ち落とすが、全てを落とす事はできなかった。

後は泥沼である、PACの指揮官は慌てたように兵を戻し、渡河し

たEUへと向かわせたのだ。

EUがその隙を見逃すはずも無く、敵の歩兵輸送者の迅速な兵員輸送により守備に残っていた部隊も橋の橋下駄まで追い詰められてしまふ。

もはや残ったのは一個機甲中隊と私が所属している第4中隊のみである。

大隊の残りは渡河に成功した敵に苦戦している。

そしてさらにだ、他の小隊の指揮権は私にはない、こうやって分隊を率いて小手先の反撃をするのがやつとのありさまだ。

いくつかの小隊は私の動きに追従してくれているようだが、大半の物はただ動かずに打ち合いをしている。

「押し込められて終わることがなぜわからない。野戦ではない、市街地戦なのだ、やりようはいくらでもあるだろうに」

そんな私の呟きも虚しく宙をさまようだけだ。

「ヤコフより小隊長へ！やりましたよ！高台を制圧しました！」

とそこに朗報が舞い込む、これで多少はやりやすくなった。

「よくやった！引き続き防衛しろ」

「了解！」

ならば私がビルで立て籠もる必要はない、他の小隊が分隊を増派してくれたお陰で、このビルもそうそう落ちそうではない。

もつと指揮のしやすい場所、つまりは高台へと移動するべく、来た道を引き返す。

それから何百、何千の弾丸を撃ちはなつたのか。

だがそんな一時の優位もすぐに失われた。

数で押しているのに一行に落ちない橋に業を煮やしたEU軍は重戦闘装甲車ゴリアスを一斉に投入した。

さらに悪い事に敵の渡河した部隊が拠点を占拠することを許してしまふ。

それは敵の輸送ヘリにより渡河を食い止めることが不可能になったことを意味していた。

圧倒的な防御力で近づいてくるゴリアスの群れに対して有功打を打つことができず、その上ゴリアスの装甲を盾に近づきながら、対戦車ミサイルを放つ敵工兵により味方の機甲戦力が次々と落ちていく私のHUDに表示されている味方のヴァイタルサインが加速度的に死亡を表す表示へと切り替わっていく。

そしていまさつき私の副官であったヤコフのバイタルも消失した。もはやこちらの戦力は3割を割った、防衛に失敗したのだ。

だが私の心はいっそ晴れやかですらあった。

「ヤコフ、マリー、リリウム…共に戦った戦友達よ。俺もやっとそちらへいけるようだ」

長く終わりの見えない戦いに疲れていた。

やっとこの虚無感から開放されるのだと、私は嬉しくもあった。

「だがまだまだ、ただでは死なん。一人でも多くの敵を道連れにしてやる」

やつらに一矢報いずして、先に逝った友たちに顔向けができるわけがない。

私は全方位無線で味方に対して独断で撤退を許可すると、建物の影に捨て置かれていたホバーバイクHACHIMOTOに乗り込む。そして弾薬集積所から持ち出したRDX（高性能爆薬によるリモートボム）をバイクの全周に貼り付ける。

そのまま起爆スイッチを握り締めバイクのアクセルを一気に全開へと持っていく。

狙うのは敵の指揮車両だ、敵の銃弾がふりそそぐがライフル弾程度ならばバイクの前面装甲で弾ける。

怖いのは敵のAPC（装甲輸送車）に設置された連発式グレネード

ランチャーだけだ。

それさえ避けてしまえば。

「見えた！」

敵の前線司令官の乗る装甲指揮車両。

私は時折装甲の隙間を抜けてくる銃弾が当たることともいわずにただ、指揮車両だけを目指してつきすすんだ。

真後ろには最新のモーションマインが追っかけてきているはずだ、だがフルアクセルならばこちらの方が早い！

ことここに来て、慌てたようにアクセルを踏み逃げようとする指揮車両だったが、もう遅い。

RDXを爆載したまま私は車両へとアクセルを吹かす、ぶつかる直前私は飛び降りると同時に起爆スイッチを押した。

強烈な衝撃派が体を叩く、私はそのまま地面へと叩きつけられ、そして…。

うすれゆく意識の中、なぜか目の前に地面の裏側が見えた気がした。地表の下には土があるのだから、そんなはずはない。

だが自分は確かに下へと落ちている感覚がある、そして自分の周りには真っ黒で塗りつぶされたように何も無い。

ならばあれはなんなのか、ほとんど遠ざかっていく一枚の絵の様にいままで見ていた地面をそっくりかがみ移しにしたあれは。

そこまで考えて、意識が闇の中へと落ちた。

急速に意識が浮上するのがわかる。

瞼の上から目を刺激する強い光を感じる。

その眩しさに手を翳しながら目を開くと、見慣れない天井が見えた。

「ここは…天国か…」

「ちよつと、勝手にしないよね」

寝ている自分のすぐ隣に誰がいる。

その声の近さに舌打ちしながら、飛び跳ねるように起きると、まるで軽業の様に壁際へと身を寄せ声の主へと視線を向ける。

このときはEU軍の捕虜になったのだと思ったのだ、あの爆発で生きているとは自分もつくづく悪運が強い。

そう認識したあとは条件反射的に体が動いてしまっていた。

だが、声を掛けた主を視界に入れて私は混乱した。

まるで軍人には見えない、それどころか医療関係者にすら見えない。美しい女性だ、青い目に金の挑発がよく似合っている。とても気立てが良さそうであり、ただただ私の行動に驚いているようだ。

敵兵の看護に一般人を使ったのか、私はそのような予測を立てると相手の行動に憤りを覚えた。

なんという危険なことを。

自分がその敵兵であることを棚に上げて彼はどうしようもないやらせなさを感じた。

そして、さすがに自分の行動のまずさを悟る。

いらぬ恐怖を感じさせてしまったのではないか、そう判断する。

ならば当事者としてできるだけ、後に引かぬように緊張をほぐして

やる必要があるだろう。

P T S D にでもなられたら可哀想である。

ゆっくりと両手を挙げて敵意が無い事をしめしながら、できるだけ言葉を選んで話しかけた。

「すまない、驚かせた。だが敵意は無い、私も驚いただけなのだ許して欲しい」

できるだけ柔和に言った積もりだったが、いつもヤコフに隊長はぶつちようらですねと言われていた手前、うまくできたかは自信が無かった。

だが呆氣にとられたような顔をしていた女性だったが、しばらくするとお腹を抱えて笑い始めた。

「あはははは…なにそれ、カエル見たいに飛び跳ねたとおもったら驚いただけなんて…あはは…あなた変すぎよ！」

息をするのも億劫そうに笑いつづける彼女。

そんなにも笑いを誘う行動だったのだろうか？

だがむしろこ気味よくほがらかに笑う彼女を見ると、どこか懐かしい気がした。

ひさしく感じた事の無かった平穏な日常の雰囲気とでもいうのだろうか、とてもそれは心地よいものだった。

気づけば釣られて私も笑っていた。

しばらく私と彼女は一緒になって笑いつづけた。

やっと笑いが収まったのか、ニヤリとしながら彼女が手を差し出した。きた。

「私はリグリッド・ヴァシアよ、あなたは？」

私はその手を握り返しながら答える。

「トーヤ・トウゴウ戦時中尉だ、まあよろしく」

だが続けて彼女から帰ってきた言葉に私は驚愕する。

「トーヤ、が名前でもいいの？でも変な家名ね、トウゴウセンジチュウイなんて」

私は驚くことしかできない、まさか彼女は階級の事をしらないのか？
そこらの子供でも中尉という階級について理解しているはずだというのに。

「ちよつとまってくれ、中尉は階級だ、階級はわかるだろう？」

だがあっさりと私の予測は覆された。

「カイキュウって？爵位のことかしら？トーヤって貴族様だったの？！」

口に手を当て、行動でも驚きを示しながら話す彼女。

その様子はとてもではないが嘘を言っているようには見えない。

「い、いやちよつとまってくれ。本当にわからないのか？じゃあ軍はどうだ、EU軍かPAC軍は知っているだろう？」

ちよつと考える仕草をしたりグリッドだったが、すぐに知らないと答えた。

「この辺りで軍隊っていったら、領主様の守備隊かしら、でもそんな大層な名前は聞いた事が無いわ。あとはアラミス王国軍の駐屯地が隣町にあるけれど…」

私はあたまの中で必死にその話を反芻する、領主に王国軍だと…。

彼女はやはり嘘をついているのか、いやだが。

そしてふと気づくのだ、窓から差し込む暖かい光。

建物が木造なのは、古い家屋なのだろうと無意識に無視していたのだが、この光は何だ？

この暖かくそして温もりを感じる光は。

私ははやる気持ちを抑えながら、ゆっくりと窓に近づき、スライド式のその窓を全開にした。

私は言葉という物がでてこなかった。

なんだこれは、なんなのだ。

そこには見渡す限りの緑と、頭上に光り輝く、それは紛れもない太陽。

だが、私の知っている太陽はこんなものではなかった。

もつと冷たく、そして雪に反射して身を焦がす存在だった。

だがどうだ、緑に反射して光るこの光景は、太陽とは、このように神々しいものであったのか……。

私が生まれたときにはすでに氷河期が初まっていた。

暖かいと感ずることなど稀であった。

赤道直下ですら雪がふるのだ。

私は目を見開いたまま、流れ落ちてくる涙を止めることができなかった。

一分、一秒でも長くこの光景を視界に納め続けていたかった。

「ちょ、ちょっといきなり泣き出したりしてどうしたのよ?！」

いつのまにか隣までやってきていたリグレッドが私の顔を覗き込んで慌てている。

私は、そんな彼女にすばらしい世界だ…と呟いた。

リグレッドはそんな私の顔をしばらく見つめていたようだが、急に私の腕に体重を掛けるように腕を組んできた。

「本当に変な人ね、でも…。そんな風に涙を流せるなんて私は嫌いじゃないわよ」

そのあと太陽が動き建物の影にはいるまで私はずっと太陽を眺め続けていた。

リグレッドもなにもいわずに私の傍に居てくれた。

そしてだが、私はずっと後になって彼女がこのとき思っていた事と、腕を組んできた理由を知ることになる。

それはまた別のはなしだが。

私には一瞬の時間のようであったが、実際は大分時間がたっていたようだ。

すっかり昼食の時間を逃してしまつたようで、リグレットが用意していた食事もさめてしまつていた。

つき合わせてしまつた彼女に申し訳なく思い、あやまつたのだが、彼女は気にしないでと言うと、てきぱきと新しく料理を作り直し始めてしまつた。

何か手伝おうとはしたのだが、彼女にそれとなく断られてしまい、いまはただ居間のテーブルに座つておとなしくしている。

なんとなしに部屋を見回して気づいたのだが、家具や扉のどれもが木造なのだ。

木材が貴重品であつた私からすると信じられないことである。

さらに驚いた事に、料理に使う火のことだ。

電気式でもない、ましてやガス式でもなさそうなのだ。

もちろん薪でもない、形としてはこちらでいう、コンロと云つていいサイズと形をしているが、どこにも外部から燃焼物を供給するようないなものがない。

次に重い浮かんではカセットコンロだ、あれならばスタンドアロインで火を灯せる。

だが携帯サイズのカセットでは長持ちせず不経済だ。

私は意を決して尋ねたのだが、返答はあっさりとしたものだった。

「ん、これ？魔石調理器よ、すつごく便利なよね。あたなの家にはなかつたの？」

「似たような物はあつたが……」

私はその言葉を濁すだけで精一杯だった。

魔石とは一体なんだ。

だが彼女は楽しそうに料理に戻ってしまった。
きつと質問をしだせば私はとまらないだろう。

それは料理をしている彼女に悪い気がした。

だからまたとりとめもなく自分だけで考えようとするが…、やめる。
世界にはわからないこともたくさんある、後で彼女に聞くのが一番
早いことに気づいたのだ。

私はそう問題を先送りになると、漂い始めたよい匂いに食欲を刺激
されながら、またも外を眺めはじめた。

出来上がった料理は、大きな豆のはいった、こちらでいうミネスト
ローネの様な物と若干固めのパン、そしてスライスされたハムと、
マカロニの様なものだ。

それらが皿に山盛りで出てきたのだ。

軍に居た頃は腹いっぱい飯を食べた事など数えるほどしかない、
私はその経験からとまどってしまい、しばらくそれらを前に手を伸
ばし掛けては引つ込めるといふ動作を無意識にしていたらしい、
らしいというのは私は自分で自覚がなかったのだ。

彼女に、食べていいのよ？と笑われながら指摘されて始めて気づい
たのだ。

私は妙な緊張感を持ちながらスープに口をつけた、そのあまりの美
味しさは覚えているのだが、あとのことをよく覚えていない。

そのままスープを一気に飲み干し、手当たり次第にパンとハムを食
い漁った気もするのだが、覚えていなければそれは無かった事だ。
そんな野蛮人のように食事をしたなど末代までの恥である。

きつと私はきつと行儀よく、よく噛んで食べたのだ…そのはずなの

だ。

だから、彼女から、そんなにお腹がすいていたのね、でももつとよ
くかんで食べないと駄目よ？と笑いながら怒られたのは夢なのだ…。

ともかくも、食事とはこのようにうまいものであったのか、私は軍
用レーションと配給される栄養だけを重視された食事しか知らなか
ったことを後悔した。

そしてこの美味しさが素材のうまみだけでなく、彼女の料理の腕で
あることも、おぼろげながらに理解したのだ。

食事が終わったあと、私は彼女と肩を並べて食器を洗っている。

これくらいならば役に立てるとおもったのだ、汲み置きのタンクに
蛇口をつけた構造の水場で私は皿を洗う、意外とコツがいるようで
彼女に汚れがのこっているとなんども怒られてしまった。

もつとも彼女はやさしく指摘するだけで、声をあげたりはしない
のだが。

私はこのようにゆっくりと時間が流れているような心境はしばらく
ぶりであった。

両親に甘えるだけの何も知らぬ子供であった時以来ではなかるうか、
あとは空腹と、軍事学校へ進んだ事でいつもなにかに急き立てられ
ているようで、心休まる時などなかったような気がする。

そして、ああそうだと思い出す。

「リグレット…。料理美味しかった、ごちそうさま」

私はいつの間に食事の際にいただきますとごちそうさまを言わなく
なったのだろうか、両親にあればと言われていた事であったのに。

「ありがとう、でも大したものを出してないのよ？あの食べっぷり
には驚いたけれどね」

「それは言わないでくれ、本当に美味しくてな。それにあんなに腹
いっぱいのご馳走を前にしたのは初めてだったんだ、勘弁してくれ」
それを聞いた彼女の顔に一瞬悲しげな影がよぎった気がしたが、す

ぐに彼女は笑顔になると

「じゃあ明日からもお腹いっぱい食べさせてあげるからね、覚悟しなさい」

「それは嬉しいような、恐ろしいようなだな」

「ふふふ、冗談よ。でも駄目よ、いっぱい食べないと大きくなれないんだから」

私はもう30にさしかかる、さすがにこれ以上大きくは横にしかないぞ、と言おうとして、一步早く彼女が皿洗いを終え皿を抱えて棚へといってしまった。

「まったくマイペースなんだか、なんなのか」

言うべき言葉を見失った口はそのようなことを呟いた。

私は自分の分の食器を洗うスピードを上げ、荒い終えると彼女のまねをして食器棚へと陳列した。

彼女は家の奥へと行ってしまったようで、なかなか帰ってこない。

私は手持ち無沙汰になってしまい、しばらく居間をふらふらしていたが、あまりに遅い彼女が心配になって、奥へと探しに行った。

億といっても居間の扉と、もう一つドアを開けるだけだが。

開けるとまた、新しく扉が二つ現れた、私は人の気配がする方を開けて固まる。

そこは浴場であるようだったのだ、だが幸いにも途中にカーテンが張られ、彼女と直接対面する事にはならなかったが。

「あ、ごめんねー？すぐにでるからそしたら、はいつていいよ」

「あ、いや、その。すまない。まさか、その風呂場であるとは……」

軍隊なら仲間の女性の裸体など見慣れたものだ、ドギマギすることもないのだが、彼女が相手だとどうも調子がでない。

しどろもどろになりながら、そそくさと居間にもどろうとしたところで、カーテンから彼女が顔だす。

「それとも、一緒にはいる？」

ニヤっとしたその顔は、子供をからかっているようだった。

「遠慮する！」

私は顔を赤くしつつも、逃げるように居間へと舞い戻った。

その後、風呂場から上がってきた彼女は真新しい寝巻きに着替えており。

私もつつけてシャワーを浴びる事にした、どうやらさきほどの魔石調理器の親戚のような構造であるらしく、ある程度私達の湯沸かし器に近い存在のようだ。

そのお陰で違和感なく使用でき、さっぱりとすることができた。服に関してだが、彼女の父親の物を貸してもらった。

やはり両親もいるようだが、その割にはこの家には彼女だけである。あまり他人の家庭状況をずかずかと聞くのは失礼だろう、いづれすこしづつ話を振ってみたいと思う。

あとは私が最初に眠っていた部屋をあてがわれた。

シーツもいつの間にかに新しい物になっており、感謝しながら私は意識がもどってからこちらで始めての夜を迎えた。

まだわからないことだらけではあるが、きっとなにかなるだろう。意識が落ちる寸前、また故郷の言葉を思い出した。

「明日は明日の風が吹く……さ」

鳥の鳴き声で目が覚めた。

私は窓へと近づくと、開け放ち、湿ったような朝の空気を大きく吸い込む、それはどこか甘みさえ感じる。

これはこちらに来てからの私の日課になっている。

あれから一週間程がたった、その間にさまざまな発見や新しい事をリグレッドから教わった。

私は朝もやの掛かった林を見つめながら、大雑把に知識を整理することにした。

まずこの世界、この惑星は”地球”ではないようだ。

太陽も月もあるが、動植物の体系が違うし、なによりも歴史が大きく異なっている。

そしてなによりも、一番違うのはこの世界には”魔法”が存在することだろう。

魔法、私も最初リグレッドから聞いたときはにわかに信じる事ができなかった。

だが、魔石調理器の構造や、実際に簡単なものをリグレッドに見せてもらった事で信じざるを得ないと半ば無理やりに自分に納得させた。

魔法については、考えると長くなるので、最後に回す事にする。

次にこの世界の情勢だ、魔法というイレギュラーがあるため所々で我々が辿った技術発展とは異なった発展をしているようだ。

また魔法が関係しているのだろうか、魔物とよばれる凶暴な生物がいるようで、それに対応するために多くの我々にはなかった社会体制がぎずかれているようだ。

まず私が居るここは、ヒルガルト大陸と言っらしい、この星には他にも大陸があるのかはわからない、リグレッドは知らないと言っていたが、まだ発見されてないだけという可能性もある。

つぎに国だが、ここはアルテミス王国の外れにある村だということ

だ、特産品なども特にないが、山と川に恵まれていて中々に住み心地は良い、すこし川沿いに下ったところにある隣町は、そこそ規模が大きい商業都市らしく、隣国との中継地点にもなっているのだとか。

主な交通機関は馬車のようだ、ただし空路が無いわけでもないらしい、ワイバーンやスカイドラゴンといった魔物を飼いならして使用するのだとか、一度見てみたい。

戦争だが、いまはどこも行っていないのだとか、ただアルテミス王国は大陸の東にあるのだが、大陸の北に存在するレガリオ帝国がきな臭いとか、巷に流れている噂なので信用はできないのだが。

ああそうそう、そして魔法なのだが、これが便利なのだそうだ。

素養のある人間ならば呪文と呪印によって、さまざまな物理現象を引き起こすことができる。

その威力たるや、達人が使えば城を一人で落とすこともできるらしい。

そしてだ、この魔法を素養のない人間が使えるようにしたものまであるのだ。

それが魔石とよばれる石を使った道具なのだが、この家にある調理器具などが魔石道具だ。

これは簡単に言えば、カートリッジシステムと同じような考え方らしい、事前に魔力と呼ばれる魔法を行使するのに必要な元素に手を加えて、特殊な形に返還して封入するのだそうだ。

そうすることによって、人の手を介さずに道具毎に設定されている魔法が発現するのだとか、動かなくなったら魔石を入れ換えればまた使えるようになるためとても便利だとリグレッドが言っていた。

それに魔石は安くはないが、日常生活では頻繁に取り替える必要が無く、意外とコストパフォーマンスも良いのだとか。

これらのことは主にリグレットから聞いたことだ、こちらに来てからの数日は私はベッドに臥せっていた。

意識がもどったあと、気にせず動き回ったのがいけなかったのか、急に痛みが全身を襲いたっていられなかった。

数日で嘘のように消えたのだが、その後もリグレットが心配して家から出してもらえなかった。

やっと、出れるようになったので村を回ってみたが、なかなか人間関係には苦勞する。

だが比較的好意的に受け入れられてはいるようだ、まあリグレットの人徳のお陰である気がするが。

そのお陰か、やっと昨日働き口が見つかった。

木を伐採する手伝いだ、なんでもこの辺りの木は質が良いらしい
ああ、これも名産品ということになるのだろうか。

ともかくも、注文が大量に入ったので、臨時だが雇ってもらえることになった。

力仕事ならば望むところである。

リグレットにばかり甘えてはいられない、すこしづつでも恩を返していかなければ。

そうだ、重要な事を思い出し忘れていた。

村の人に聞いたのだが、なんでも俺はヘンテコな服を着て村の近くに倒れていたのだとか。

ヘンテコな服というのはボディーマーのことだろう、それを数人がかりで脱がせると死んだように眠る俺が出てきたそうだ。

しばらくそんな怪しい俺をどうするかで意見が割れたそうだが、リグレットが引き取ると宣言すると俺を抱えて連れ帰ったのだとか。

まったく本当にリグレットには頭があがらない、リグレットがいなければ死んでいただろう。

ちなみにヘンテコな服もといボディーマーは戻ってきた。

これもリグレットの人徳のお陰か、後で村の男達がリグレットの家

まで届けてくれたそうだ。

ちなみに武装などは無かったようで、一応扱いを間違えれば大惨事になるため、それとなく聞いて回ってはいるが、どうやら本当にないようだ。

まあどの道、弾薬が尽きたらただの鉄の塊である、あってもなくても変わりはないのだが、なんとなく激戦を潜り抜けてきた相棒であるだけに、愛着があつたのだ。

こんなことを考えていると太陽が顔を上げ始めた。

初日から遅刻はできんからな、私は準備をはじめるとリグレットを起こさないように仕事へと出かけた。

林業の朝は早い、なにせ暗くなったら仕事は問答無用でできなくなるのだ。

夜の山林ほど注意しなければいけないものはない、特にこの世界では熊などよりも恐ろしい魔物がいるのだ。

私が集合場所にいくとすでに親方が仁王立ちして山の方を睨みつけるように眺めていた。

「おはようございます」

「おう、早いな。良い心がけだ」

ニツツと笑いながら、私の方を向き、今日はたのむぞと声を掛けられた。

「ええ体力には自信がありますから」

「はははは、そいつぁいい。期待してるぜ」

たわいもない話を親方としてしていると

ぼちぼちと作業員が集まってくる、最後の一人が来たというので数えていると40名ほどいるようだ。

なかなかの規模である、どうやら若い者にも人気がある職らしく、下は15か6位の少年から見受けられる。

親方に聞くと

「おうよ、この村の木は人気があるからな。稼ぎがいいのよ！」
なるほど、さもあらのである。

また作業員以外にも、剣や弓矢で武装した人間が3名ほど着いてきた。
た。

今度は先輩に聞くと

「ああ、ハンターの人たちだね。魔物が出てきたときの用心だよ。
いい木はやっぱりある程度山奥へいかないといけないからね」

普段は普通の獵師の人たちらしいが、この辺りではそれで十分なのだそうだ。

強力な魔物が現れたことは無いらしい。

もつとも、ここ以外ではきちんとした魔物相手には冒険者や傭兵を雇うのが一般的だそうだ。

「ただ彼らを雇うのもタダじゃない、それにうちは田舎だろう？あまり高い給金もだせないしで、冒険者のヤツラは誰もきたがらないのさ」

まあそういうものなのかもしれない。

適当に相槌を打ちながら歩き続けると、先頭を歩いていた親方が立ち止まると振り返ってさげふ。

「よし、今日はここから始めるぞ！班分けはいつもどおりだ、きばつていくぞ！新入りはわしんとこにこい。さあ始めた始めた！」

親方が号令をかけると、作業員たちはおのおのの分担に応じて作業をはじめた。

俺は小走りで親方の下へと駆ける。

「おう、来たな。とりあえずは仕事を覚えてもらわなきゃなんねえ、とりあえずだ木を切った事は？」

「丸太ならあるが、生えているのは無い」

訓練学校のサバイバル演習で斬った事があるだけだ、もちろん素直にしゃべる。

「そうか、まあないよりはましか……。よしついてこい」

私はその後親方から木の切り方と、特に大事だと、安全確認の重要性を指導してもらった。

安全確認の重要性は軍人ならば腐るほど言い聞かせられ、たたきこまれる。

大丈夫だろうと銃口を覗き込んで死んだ奴など腐るほどいるのだ。

そして、銃がもつチームキルTKの危険性は肌身をもって実感している、ほんのちよつと安全を確認すれば防げた誤射など星の数ほど事例がある。そういつた経験から実に注意深く説明を聞く私のことを親方は評価してくれたようだ。

さつそく切つて見ろといわれたので、説明されたとうりに挑戦する、最初こそノコギリの扱いに四苦八苦したが、丸太を切った感覚を思い出し始めると、後は早いものだ。元々鍛えていた体力のお陰でさして疲れることも無く一本を切り倒す。

「ほー、なかなかどうして、見込みがあるじゃねーか」

「こんなもんですかね」

私もすこしだけ得意な気分になり、気分がいい。

さあ次は枝を払いこいつを丸太にする作業だ。

そんな調子でやっていたら二本目からは独りでやっていいとの親方の許しを得たので、次々と木を切り倒していった。

もちろんあまりやりすぎるのはよくない、周りのペースに合わせながら丸太を量産していく。

大体5本目を作り終えた時だ、太陽がもうすこしで天頂という頃合のころだったと思う。

突然斜面の一番上の方で作業していた仲間達が駆け下りてきた。

彼らは口々に出たぞーと叫んでいる。

「なにがでたんだ？」

私はぼけーっとその様子をつつたって見ていたのだが、親方がすぐにやってきて怒鳴る。

「なにしてるんだ！麓にむかって逃げろ！」

「急にどうしたんですか？」

「魔物だよ、魔物がでたんだ！くそっ、わしは言っただけ早く逃げろよ」

そういうと親方は両刃の斧を担いで、斜面を登っていく。

自分には逃げると言いながら、本人は魔物へむかって駆け上がっていくのか。

私はその姿勢に好感を持たざるをえなかった。

「さて、どうするか……」

幸い魔物は私の場所からは見通せない位置にいるようだ、いまなら逃げる事は容易だろう。

だが、どんな魔物が出たにせよ、ハンター3人と親方だけで倒せるものなのだろうか……。

そして私は軍人だ、軍人の本分は戦う事である。

ならば……

「逃げることはできんだろう」

そう呟くと仲間のだれかが放置していった片刃の斧をひつつかみ親方の後を追いかけた。

数分ほど駆け上がると親方に追いついたが、すでに魔物と交戦しているようだ。

その魔物なのだが、見た目は巨大な鳥であった、2m半ほどあるだろうが、ときおり嘶くように甲高い声を上げながら、その巨体と大きな嘴を使ってつく様な攻撃をしていた。

その威力はあなどれないようだ、ハンターの一人が大きな嘴を避け

た際だが、嘴を勢い余って立ち木に打ち付けたのだが、もののみごとくに木がくだけ、半ばから折れるように倒れたのだ。

アレを食らえば人間などひとたまりもないだろう。ならば取る戦術は一つだ、ヒット&アウェイでじりじりとダメージを蓄積させていくのが堅実だ。

事実ハンターも親方もそのような戦いをしていた。

「私も助成します」

そう言いながら斜面を駆け上がり、オオトリの後ろ取ると力任せに斧を叩きつけた。

すると予想よりも身軽な動作で相手が振り向きざま嘴をはなつてくる、間一髪でそれを転がるようによけると、じりじりと間合いをはかる。

手ごたえはあった、ダメージは通っている。

「おい新入り、無茶なことをするなあ」

親方が声を掛けて来たが、その顔は面白そうに笑っていた。ハンターたちも親方ほど豪胆ではないようだが、挫けてはいないようだ。

回り込んだハンターの一人が弓を放つ、体表に生える体毛のせいで深くは突き刺さらなかったが、オオトリの注意をそらすには十分だったようだ。

そこを見逃さずにこんどは、あしをめがけて走りより、オノを振るう。

「ガアアアアアアアア」

効いているようだ、痛みに耐えるように声をあげるトリのバケモノ。あいかわらずの軽快な動作で振り向くが、すでに予測済みの動作だ、すでに安全圏へと退避している。

そしてそれに合わせて打ち合わせをしたかのように、他のハンター達が弓を居掛けたり、剣で切りかかりと相手に反撃する間を与える事無く攻撃を通していく。

悪あがきのようにその巨体で突進をしてきたりもしたが、場所がよ

かった周りの木々をうまく使う事で、逆に相手を木につっこませ、より優位に攻撃を重ねていく。

もはや相手は満身創痍だ、そろそろトドメをさしてやろう。私だけではない、そのばに居た全員が勝利を確信した瞬間、強烈な一撃と共に私は吹き飛ばされた。

受身すら満足に取れずに宙を舞い、そしてたち木へと叩きつけられた。

「がはっ」

肺の中の空気が強制的に對外へと押し出される、酸欠により眩暈と衝撃による全身の痺れが襲う。

辛うじて首を動かして確認すると斜面を転がるように倒木が斜面を下っていく。

木が倒れたのか、いや違う。そのような衝撃ではなかった。

「オーガだ！」

剣を持ったハンターがそういったのを辛うじて聞き取る。

体を無理やりに捻り、そちらを見て啞然とした。

まさに巨体、5メートルはあるのかという人型の怪物がのしのしと近づいてきていたのだ。

もしかしてと思う、さっきは奴が木を引きちぎりそれを投げつけてきたのであるのか？

いや、まさかという思いと、状況から導かれる予想に一瞬思考が停止する。

「なにをしておる、にげるぞ！」

親方に無理やり抱き起こされて駆け下りるように坂を下りていく。もはやすでにオオトリは一目散に逃げ出していたようだ。

影も形も見当たらない。

ハンターたちなどは武器すら放り投げてガムシヤラに前を走っている。

「駄目です、親方。私を置いていってください。このままでは逃げ

切れません」

「なにをいうか、そんな口を聞く前に気合をいれろ、さあ走るんだ。走れ」

だが先ほどの衝撃がまだ抜けていない、今は殆ど親方に背負われて
いる状況だ。

このままでは親方の息があがってしまうし、速度も出ない。

相手が多すぎるゆえの距離の錯覚だろうが、ゆっくり歩いているよ
うに見えるオーガだが実際は相当な速度が出ているのだ、このまま
では追いつかれるし引き離せない。

村にあいつを連れて行くわけにはいかない。

「私は大丈夫です、だからさあ、手をはなしてください」

「馬鹿を言うでない、わしは誰かを見捨てるなんざ、もう一生しな
いと誓ったんだ。死んでも離すもんか」

そう喋る親方には、ある種の覚悟がこめられている気がした。

この人は死んでもそれを実行するだろう。

ならば私がなにをいったところで無駄である。

後ろを振り返りつつ思う。

対戦車ライフルであるパイラムがあつたなら、いやアサルトライフ
ルでいい、B a u r が欲しい。

この際拳銃であっても構わない、俺の世界の兵器が武器があつたな
らば。

ここで死ぬのか…。

だが一度は死を覚悟した身だ、それが何かの間違いで数日間延長さ
れたにすぎない。

そう考えれば別になんでもないことのようにも感じる。

ああだが、リグレットのことだ、彼女の事を思い出す。

あのように太陽の様な女性を私は知らなかった。

そうだ、そうではないか、まだ死ねない。私は死ねない。

彼女に恩を返すまで、いや、彼女を悲しませる原因が私である事な

ど到底容認できない、これは、この気持ちはなんであろうか。
だがいまはそれはどうでもよい、武器だ、戦う術だ、それが欲しい。
ああ神がいるのならば。

私をこの世界へと誘った存在に、原因に、意思があるというのならば、私に力を貸せ。

奴を跪かせる術をよこせ！

ばかろうがああああああ。

```
↓Master server connect  
server not running  
play to single...  
find MOD files  
Loaded  
Welcome to the our World  
↓HUD System online  
check at self condition  
config files damaged  
↓all config initialized  
recreate config files  
System all green  
Netbat running  
HUD on screen
```

見慣れない文字列が、自分の眼前に投影される。

なんだこれは・・・、だが一瞬の停滞の後その表示は、戦場で使い
見慣れたヘルメット一体型HUDの物へと変わる。

だがかしである、いまはヘルメットなどしていないのである、だ
が目の前には浮かび上がるかのように、HUDの画面だけが表示さ

れている。

HUDは透過型の小型薄型スクリーンに表示されるものであって、決して何もない空間に投影されるものではない。

だがいまは、いまだけはこの奇跡に感謝したい、なにか出来るのだからきつと。

私は目を血走らせるようにそ宙空のHUDに目を走らせる、そして見つけた。

兵科という本来のHUDにはない、見慣れない表示があることに、従来のHUDもセンサーカメラが捕らえる視線と簡単な脳波によりHUD画面上の操作を行う作りになっていた。

当然のように、この謎のHUDでも同じ動作ができた。

兵科を選択、偵察兵、突撃兵、工兵、援護兵、カスタムという一覧が表示される、その右にはヴィジュアルで装備している兵装が「表示されていた。

私はまよわず突撃兵を選択すると、右に表示されたBaurに目を走らせる。

操作などわかるはずもない、だが直感的にBaurをドラッグすると、その上に表示されていた。なにも装備していない人型のシルエツトへとアイコンを運ぶ。

なにか起きる。

そう祈らずには居られない、アイコンをシルエツトの上で離れた、するとシルエツトの右手側の空欄にバウアーがカチリトはまりこむ。その瞬間、俺は咄嗟に親方にしがみ付いていた右手を離す。

するとどうだろう、右手が一瞬光を放ったあとその手のひらにしっかりとBaurをアサルトライフルを握っていたのである。

慣れた手つきで弾丸を確認する、フルチャージだ。備え付けの予備マガジンもしっかりと付いている。

いける、これならはいける。

親方は前だけを向いて走っている、気づいてはいない。

それに先ほどから体の痛みが急速に和らぎはじめたのだ、そして

うすでにしびれは綺麗さっぱりとなくなっていた。

「親方、走れる。降りるぞ」

そう声を掛けると、親方が一瞬逡巡したのちに、手を離してくれた。私はしっかりと自分の足で地を踏みつけると、だが前に走りはせずに後ろを振り向く。

すぐに親方が気づいて足をとめた。

「おぬしやはり！」

走れるというのが嘘であるとおもったのだろう、引きずっても再度掴みなおそうとして、私が構えているものに気づく。

「なんだそれは、おぬしいつのまに、そんなものを……」

不思議に思われても仕方がない、後で追求されるだろうがこの際だ。それに私自身が不自然に感じているのだ、なにをいっても嘘しかでてこない。

だが、この銃の重量感、存在感は虚構などではない。

私は親方に耳をふさぐ様に声を張り上げる、一瞬ののち親方が耳をふさぐのを確認して、構えたBaurを三点射する。

狙うのはもちろん敵の顔面だ。

一発目は胸に、二発目は首に、三発目は頭へと付きささる。

オーガは一瞬ふらつくが、倒れはしなかった。

「っち、骨か！」

頭に当たった時は相手が倒れる姿が頭をよぎったが、オーガは着弾点から血を流しながらも勢いを留めずに、むしろ加速して突進してくる。

それをローリングの要領で右へと避ける、親方の事が頭をよぎるが、親方は親方でうまく避けたようだ。

そしてオーガも親方ではなく、私へとその視線を向け、強烈な殺意をぶつけてくる、傷をつけられたのがよほど立腹なのだろう。

ならば、お腹いっぱいです、ごめんなさいと鳴いて叫ぶまで鉛の玉をご馳走しようではないか。

相手の的がデカイのを幸いに私はBaurをフルオートで連射する。

分間600発という発射速度を誇る大口徑ライフルである、もちろんマガジンは20発なので実際はものの2秒で撃ちつくしてしまうのだが、その威力は馬鹿にならない。

兵士が着込む、ナノ高分子素材製のボディアーマーの衝撃吸収力を3発で無効化し、心停止を引き起こす強烈な衝撃を与えるだけでなく、至近距離に置いてはボディアーマーを貫通し、致命傷を与え、また特殊な対人アーマー弾等により、100mの距離からでも14mm厚の鉄板をやすやすと貫通する。

それを20発ぶち込まれるのである、これで生きているのならばまさに化け物である。

だが、オーガはまさにその化け物であった。

「グオオオオオオオオ」

オーガーが全身の筋肉に力を入れるとその圧力によって、突き刺さった銃弾がそとへと弾き飛ばされる。

「なんてやつだ、筋肉で銃弾を受け止めやがった」
寒気がするようなタフさである。

だが確実にダメージは通っている、それに顔面だ、最初にあてた顔面への射撃。その弾丸は外へと飛び出してはこなかった。

だが筋肉がないとはいえ、銃弾をとめる頭骨だ、だがそれでも人型であるのならば、ウィークポイントも同じであると信じて、狙いをつける。

すでにマガジンは手早く交換済みだ。

だが、オーガーもそう簡単には撃たせてはくれない、大きく手を広げながらものすごい勢いで再度の突進を掛けてきた。
チャンスは一度だ。

私は、全身の神経と忍耐をその一瞬のみつぎ込んだ。

オーガが私目掛けて腕をふるう。
いま！

振るわれた腕をギリギリで避ける、そして運動エネルギーを消費して一瞬停止した腕へと跳躍する。

あとはその太い腕を奴の肩目掛け賭けのぼる。

「これで終わりだ！」

高さを取った、ここからなら頭だけに銃弾をぶち込める。

着地のことなど考えもせずに、空中でBaruを連射する、長年の経験がリコイルを最適な強さで調整し、弾は吸い込まれるようにオーガの頭部へ着弾する。

一発、二発、三発、四発！

ゴリツツという鈍い音と共に銃弾が骨を砕き脳へと達する、さしものオーガも脳を破壊されては動く事は出来ない。

崩れ落ちるように倒れると、ぴくっぴくっとう痙攣したのちに動きを止めた。

叩きつけられるように地面へと降りる私。

さすがにアーマーなしであの高さから落ちればただではすまなかったようだ。

右足は完全に折れている。

だが、やつはしとめた、ならばきつと親方がうまくやるはずだ。私はそのまま意識を手放した。

目が覚める、意識が覚醒する。

またも眩しい光が顔に差し込んでいるようだ、手でそれを遮りながら目をあけた。

そこには泣きはらしたような目をしたリグッドが私の顔を覗き込んでいた。

「すまない、心配をかけたようだ。」

「そうよ…、いっとくまずけど私は怒ると怖いんですからね…」

そんな顔で言わないでくれ、罪悪感で押しつぶされそうだ。

「すまない」

だが、私の口からは謝罪しかでてこない。

気の利いた言葉の一つもいえればいいのだが、生憎と彼女の顔をみたらなんの言葉も思い浮かんでこなかった。

「いいこと、罰としてしばらくは外出禁止、ベッドからも出ちゃ駄目よ。そしてね、元気になったら私の料理をお腹いっぱい毎日食べるのよ」

「ああわかった、それは怖い罰だな。」

とりあえず私はまた命を拾う事ができたようだ。

すこしだが、事の顛末を聞く事が出来た。

なんでも私が魔法の道具を魔法で取り出し、オーガと死闘を繰り広げたということになっているらしい。

たしかに、一面では間違っではないなかったので、曖昧に肯定しておいた。

だがリグレットはあまり信じてはいないようだったが、とりあえずこの話を広めているのは親方であるらしい。

とりあえず魔法の道具ということになっているのならば、めずらしいもしくはそうかで済むらしい。

まあ親方には感謝しておこう、それに実際親方が半ば本気でそう信じている可能性もある。

あと俺が取り出したBaurだが、俺が意識を失うと掻き消えるかのように消えたそうだ。

これは親かたがりグレットだけに言付けてくれたことだ。

それとあのオーガだが、遙か遠くの山からはぐれてきた固体らしく、二つ隣の山付近で目撃情報があり、ギルドと呼ばれる組織が警戒を行っていたようだが、その網の隙を突いて、こちらへとやってきたらしい。

えらくギルドの人が感謝しているそうで、討伐報酬を支払ってくれるそうだ。

私はこの様なので、全てリグレットが間に入ってくれたのだが、中々に彼女はこういった交渉とか対人関係を築くのがうまいようだ。報酬は通常の1・5倍だすという約束を取り付けてしまった。

もちろん私は全てをリグレットに渡すつもりなのだが、ある程度の資産にでもなるような額であると良いのだが。

（後書き）

続きません。

要望があれば書くかも、でもそんな人いないですよー。

1 / 26 追記

とある兵士の受難と幸福 続

<http://ncode.syosetu.com/n4993j/>

なんか続いてしまうようです。

ですが、基本的に続かないっ！

感想という養分を与えると、稀に続きと言つ花をさかせるようです

ちなみに、地面の裏側云々というのは3D Gamerならわかると思いますが、3Dゲーム特有の現象で時折地面の当たり判定を貫通して、地面のテクスチャをキャラが通過してしまうバグというか、仕様のような不具合のことです。

その後はゲームによって違いますが、永遠に落ち続けるものもあれば、なぜか急に空へと瞬間移動して、そのまま地面に叩きつけられるものなど、さまざまです。

そんな中には、異世界に通じているものがあつたりするかもね、という妄想が執筆動機です。

お目汚し失礼しました。

1 / 22 追記

まだいっぱいあるけど

ひっそりと誤字脱字、謎の意図しない改行を修正。

そしてまさかその日のうちに感想が着くなんて…、感激。

しかして続きを書くかは…。

もうひとつの方が煮詰まってしまい、その気分転換で描いた感もあるのです、いくつか続きのネタを考えてはいますが、思案中です。申し訳ない！

ちなみにBF2142かCrysisかで迷いました。

マキシマムパワー！（アナゴヴォイス）とか叫んでナノスーツでオーガと殴り合う場面も面白そうだったけど、武器自体はあんまり現代と変わらん気がしたのでボツ。

ガウスライフルとか一部は変に未来的なのにな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4993j/>

[BF2142]とある兵士の受難と幸福[×（クロス）オリジナルワールド]

2010年10月14日18時13分発行